

織田氏の制札の研究

—— 信長発給文書を中心に ——

富 澤 一 弘 ・ 佐 藤 雄 太

Study on Seisatsu of Oda Clan

Tomizawa Kazuhiro · Sato Yuta

序 章

第1節 研究の目的

筆者らはこれまでに戦国期における制札の研究、特に関東甲信越地方を中心に行なってきた（「未刊行論文、戦国期における制札の研究—関東甲信越地方を中心として—」平成22年2月）。

制札とは法令・禁令などを板札に墨書し、町辻・橋詰など人目につきやすい場所に掲示したものである。禁令の掲示は奈良時代末から見られたが、制札として形が整えられるのは、室町時代に徳政・撰銭・喧嘩口論などの札が立てられてからであり、戦国時代に全盛期を迎える。

制札は他にも「禁制」「制札」「高札」などと呼ばれるが、その内容に大きな差があるわけではない。呼称は大家や時代、地方などで様々であるので、以降は「制札」の語を主に用いることにする。

戦国時代には、庶民の地位の向上により法令の対象が拡大され、広く一般庶民に告知する法令が多く出されるようになるとともに、戦乱のなかで兵火の災害を避けるため、寺社などは軍隊の通過・戦闘に先立って、その武将の保護を求めて制札を申請することが多かったため、この時期には全国的に多くの制札が出された。

これら制札は当初、寺社に対する信仰の観念より保護する目的で与えられたと思われるが、禁制の申請の際、筆耕銭・取次銭・判銭・札銭などの仲介料を支払って与えられたため、戦国時代その需要が急速に高まると、大名などの軍事資金調達の一手段として利用されるようになった。

また、制札はその安全を保障する性質を持つため、強い権力が必要であり、複数の勢力が争っている地域においては最も力のあった勢力に保護を求めたと考えられる。そのため制札は、当時のその地域の情勢をよく示すものである。

このように制札は、その地に禁令や決まりごとを掲げるだけではなく、それを発給した大名の権威を如実に表すものである。

これまでの研究で制札の増減とその際に起こった出来事の関連性や各勢力の制札発給の特徴を検討した。特に後北条氏・武田氏においては「制札」「禁制」「高札」などの文書の文頭表記に注目し、時代・地域・発給者などにより文頭表記を使い分けていることを明らかとした。

後北条氏では支配力の強い地域においては「禁制」を用い、一方武田氏では本国甲斐以外では「高札」を用いる傾向があるなど、制札は領国支配の点でも注目できることがわかった。

本論文では織田氏における制札の研究を行ないたいと考えているが、織田氏の領国は西は中国地方の一部、東は甲信地方までと、広範囲にわたる。また、各地方に重臣を派遣、その地方について一任しており、これら制札の史料を全て集めるには多くの自治体史を見る必要があり、多くの時間が必要であると思われる。

このような理由から、まず本論文では織田信長自身の制札を中心に収集し、その様式を見ていく。そしてその後に、明智光秀・柴田勝家といった各地方を任された重臣や特異な制札を検討する際の基礎としていきたい。

第2節 収集した史料について

織田氏の制札の研究において史料は奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月）、同下巻（吉川弘文館、昭和63年9月）、同補遺・索引（吉川弘文館、昭和63年9月）、愛知県史編さん委員会『愛知県史』資料編10中世3（愛知県、平成21年3月）、同資料編11織豊1（愛知県、平成15年3月）、岐阜市編『岐阜市史』史料編 古代・中世（岐阜市、昭和63年2月）から収集した。これを基に制札一覧表を作成し、以下の図表もこれらを基に作成した。

第1章 織田氏の制札の数量的検討

第1節 織田氏の制札数の変遷

筆者らはこれまでに、織田氏の制札を信長文書を中心に183通集めることができた。これを年毎に表した図を作成した【図1】。

この制札数の変遷を見ると、永禄11年（1568）、天正元年（1573）から同3年ごろ、天正10年（1582）に制札が多くなっている。この制札の多い時期において、織田氏にどのようなできごとがあったかを見ていき、制札の増減と歴史的できごとの関連性を検討する。

1) 永禄11年（1568）

この年、織田信長は、前年8月に美濃国稲葉山城を攻略し、岐阜城と改名し本拠とした。

さらに同年7月、織田信長は後の15代将軍足利義昭を岐阜に迎え、9月には義昭を奉じて上洛している。この際、山城国を中心に近江国・大和国・摂津国・河内国と近畿地方の広い範囲に制札が発給されており、それがこの量の多さに反映されたのであろう。代表的なものとして法隆寺宛の

表1 制札一覧表の一部

元号	西暦	日付	機軸	文相	形式	花押などの様式	勢力	宛先国	現在の住所	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	内容	宛姓の王姓	宛所
天文18	1549	11月1日	織田信長制札	5箇条	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県土屋市市原田区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	熱田ハヤト守院
21	1552	9月10日	織田秀勝制札	なし	本文後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田秀勝	法華寺
21	1552	10月12日	織田信長制札	なし	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	大塚平七郎守院
22	1553	9月10日	織田秀勝制札	なし	本文後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田秀勝	法華寺
22	1554	11月22日	織田信長制札	なし	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	服部六郎守院
22	1555	12月9日	織田信長制札	なし	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	三興院
23	1554	9月9日	織田近衛制札	なし	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田近衛	立和寺
24	1555	7月7日	織田信長禁制書	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	正法寺
弘治2	1556	2月2日	織田秀俊制札	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田秀俊	崇徳堂
3	1557	11月27日	織田信長制札	なし(参考)	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	熱田持成院
3	1557	11月27日	織田信長制札	なし(参考)	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	熱田持成院
永禄1	1558	12月2日	織田信長禁制	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	白雲寺
永禄1	1558	12月2日	織田信長禁制	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	正親寺
3	1560	12月2日	織田信長禁制	禁制	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
4	1561	3月3日	織田信長禁制	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
4	1561	3月3日	織田信長禁制	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
4	1561	3月3日	織田信長禁制	禁制	本文後の名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
4	1561	5月5日	織田信長禁制	禁制	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
4	1561	6月6日	織田信長禁制	禁制	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
6	1563	10月10日	織田信長禁制	禁制	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺
6	1563	12月12日	織田信長禁制	禁制	本文後に名前の後に花押	織田氏	尾張国	尾張国	愛知県名古屋市中区山崎区	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	加藤・赤松・織田・豊田・徳川・その他	織田信長	東慶寺

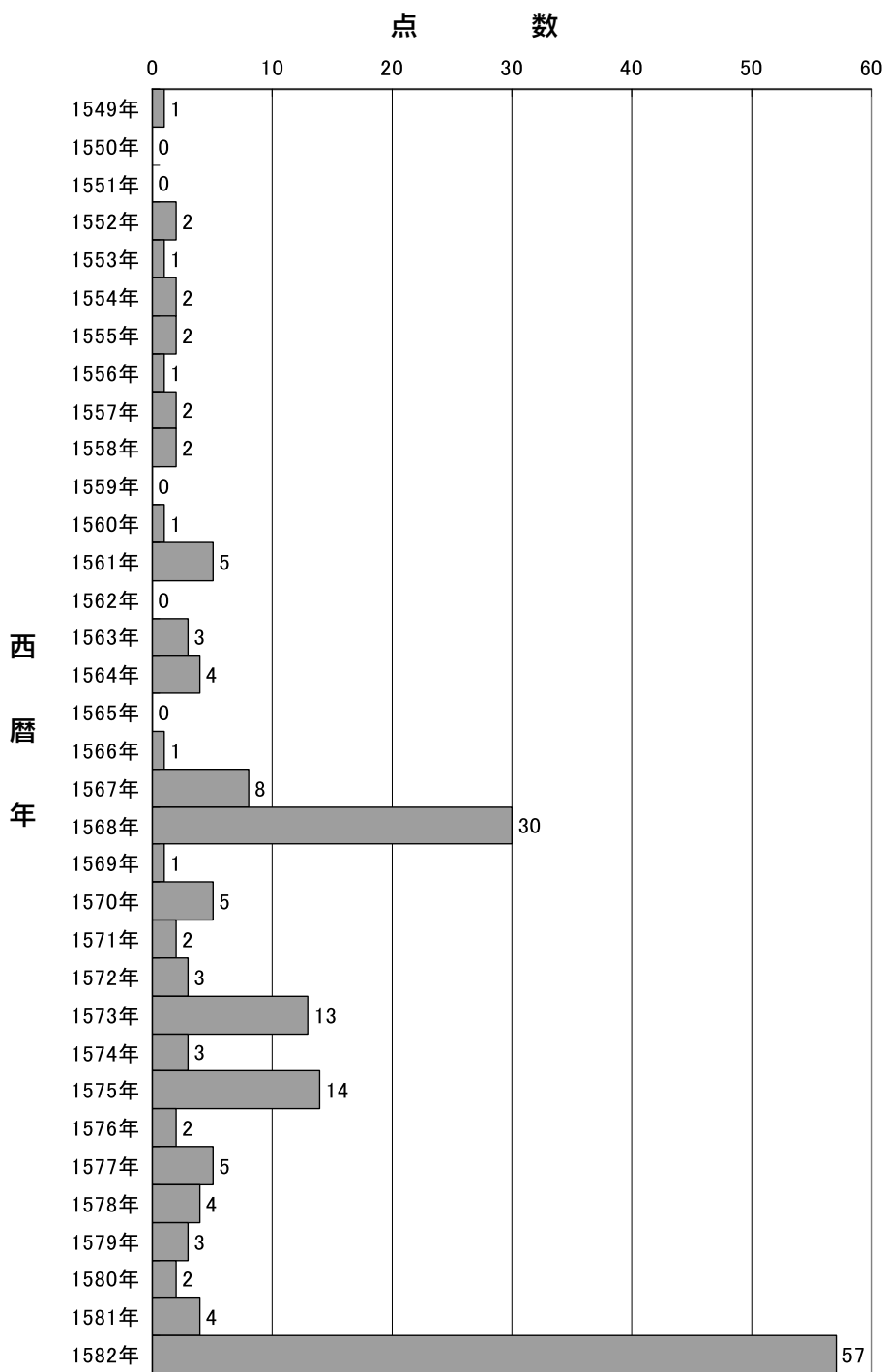


図1 織田氏の制札の数

文書を見てみる【史料1-1】

【史料1-1】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 221-222頁

（一二八）大和法隆寺宛禁制（『菅孝次郎氏所蔵文書』○常陸）

禁制

大和法隆寺

一、当手軍勢濫妨・狼藉之事、

一、陣取、寄宿、放火之事、

一、相懸矢銭・兵糧米等事、

右条々、於違犯之輩者、速可処厳科者也、仍執達如件、

永禄十一年十月日

弾正忠（朱印）

この文書とはほぼ同様、もしくは3箇条目を竹木の切取の禁止とした3箇条形式の制札が広範囲かつ大量に出されている。定められていることは軍勢に対する統制であり、他の大名家でも見られるような典型的な戦時禁制である。

織田信長は上洛に際して、これらを大量に発給することで、軍規を取り締まるとともに、次代の権力者として権威を示したと考えられる。

2）天正元年（1573）

この年7月、織田信長が足利義昭を追放し、8月には朝倉・浅井氏を滅ぼしている。また、武田信玄も没し、東方面は優勢となった時期である。

しかし本願寺・一向宗との争いは激化し、西方面での制札も多くみられる。

3）天正3年（1575）

この年織田信長は越前国の一向一揆を鎮圧し、柴田勝家を越前国に封じている。この地域の争いがひとまず終息したことで越前国とその周辺に制札が多く出されている。

4）天正10年（1582）

この年3月、織田信長は甲斐国武田氏を滅ぼし、その領地であった甲斐・信濃・上野の一部を得た。その際、甲信両国に掟書を出している。

また、この時非常に多くの禁制を発給している【史料1-2】。その数は50通（内3通宛所不明）ほどあり、武田氏の旧領へ一斉に禁制が発給されたと思われる。

【史料1-2】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』下巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 714-715頁

禁制

大嶋町

一、甲乙人等、乱妨・狼藉事、

一、対還住地下人百姓、成煩事、

一、非分課役付、御判錢・取次錢・筆料等・一切禁制事、

右条々、若有背之族者、忽可被処嚴科者也、仍下知如件、

天正十年三月 日

(信長)⁽²⁾
(朱印)

この文書は3箇条の様式であり、先の上洛の際の文書と内容も似ている。しかし、「御判錢・取次錢・筆料等・一切禁制事」といったことが追加で書かれており、武田氏の旧臣に対して配慮していることがわかる。3月中のものにはこの追加された部分がない制札も見られるが、4月に出された制札にはほとんどに見ることができ、この間に信長からの指示などもあったことも推定される。

第2節 数量的検討の結果

織田氏の制札数の変遷は、実際のできごとと関連性が非常に強く、岐阜を本拠とした際、足利義昭を追放した際、甲斐武田氏を滅ぼした際と制札の多い年は織田氏の画期となっている。

本論文では織田信長自身の文書が中心であり、織田氏全体ではなかったが、非常によい結果を得ることができた。このことは制札の面において、やはり織田信長が核をなしていたことを示しているとも考えられる。今後の織田氏の研究でさらに詳しく検討していきたい。

第2章 織田氏の制札の文頭表記の検討

第1節 織田氏の制札全体の文頭表記の割合

織田氏の制札は現在集めたところ、禁制135通、制札2通、定13通、条々3通、掟2通、表記なし14通、その他27通、計183通であった【図2】。

織田氏の制札の表記はそのほとんどが「禁制」表記であると言える。「制札」については2通しかなく、後北条氏や武田氏など関東甲信越の大名家とは異なる傾向である。

例えば後北条氏の場合は、永禄頃までは「制札」を用い、それ以降本国や支配力の強い地域では「禁制」を用いている。また武田氏においては信玄時代に「制札」「禁制」「高札」が併存しており、地域などにより使い分けていたと思われる【註1】。

織田氏は後北条氏や武田氏と異なり、一貫して「禁制」の割合が多く、初期から文頭の表記につ

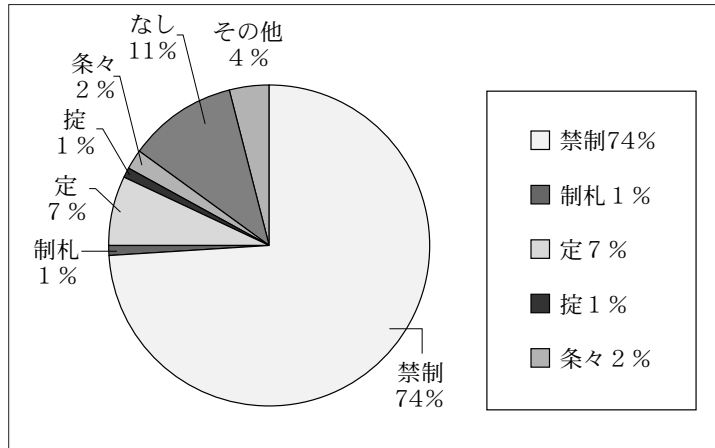


図2 織田氏の制札の表記の割合（全183通）

いては統一されており、また変更もしなかったと考えられる。

このように「禁制」でほぼ統一されている織田氏における「制札」の2通は、天文18年（1549）の最初期の1通【史料2-1】、そして尾張瀬戸宛の1通である【史料2-2】。以下でこれらの文書を見てみる。

【史料2-1】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 14-15頁

（一）尾張熱田八ヶ村宛制札（名古屋市、加藤秀一氏旧蔵『尾張国遺存織田信長史料写真集』
「口絵」）

制札

- 一、当社為御造営、宮中可被収入別、然上者、国次棟別并他所・他国之諸勸進令停止事
- 一、悪党於現形者、不及届可成敗事、
- 一、宮中任先例、他国・当国敵味方并奉公人、足弱、同預ケ物等、不可改之事、付、宮中へ出入者江於路次非儀申懸事、
- 一、宮中江使事三日以前□□（『張州雜志抄』は「此間不分明」とする）并其村へ相届之、遂糺明、其上就難渋者、可入譴責使事、
- 一、俵物留事、任前々判形之旨、宮中江無相違可往反事、
- 右条々、於違犯之輩者、速可処厳科者也、仍執達如件、

天文十八年十一月 日

藤原信長（花押）

この文書は織田信長の初見文書として知られるものであり、まだ当主となっていない時代のものである。そのため後の時代のものとは異なっていると思われる。

次にもう1通の「制札」表記である永禄6年瀬戸宛の文書を見てみる。

【史料2-2】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 79頁

（四三）尾張瀬戸宛制札（「加藤新右衛門氏所蔵文書」『尾張国遺存織田信長史料写真集』所収）

制札

瀬戸

- 一、瀬戸物之事、諸郷商人國中往反不可有違乱事、
 - 一、当郷出合之白俵物并塩あい物以下出入不可有違乱、次当日横道商馬停止之事、
 - 一、新儀諸役・郷質・所質不可取之事、
- 右条々、違犯之輩在之者、速可加成敗者也、仍下知如件、

永禄六年十二月日

^{（信長）}
（花押）

この文書の内容を見ると、瀬戸焼の商人の保護、白俵物（米）・塩あい物（海産物）などの出入りの許可など商業関連のことが定められており、「市」という語はないが、おそらく市に出された制札であると考えられる。これは筆者が調べた限り、最初の市に対する制札である。

なぜこの文書が「制札」の語を用いていたかであるが、織田信長は商業関連の制札には「定」という文言を用いていたことに注目したい【史料2-3】。

【史料2-3】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 134-135頁

（七四）美濃楽市場宛制札（円徳寺所蔵）檜板原寸（三六・五糎×三三糎、厚一・〇糎）

定

楽市場

- 一、当市場越居之者、分国往還不可有煩、并借錢・借米・地子・諸役令免許訖、雖為譜代相伝之者、不可有違乱之事、
 - 一、不可押買・狼藉・喧嘩・口論事、
 - 一、不可理不尽之使入、執宿非分不可懸申事、
- 右条々、於違犯之輩者、速可処厳科者也、仍下知如件、

永禄十年十月日

^{（信長）}
（花押）

この文書は織田信長が初めて楽市を定めたものであるが、「定」の表記である。これ以降も商業関連は「定」が用いられることが多く、織田氏が通常用いる「禁制」と区別していたと考えられる。

先の瀬戸宛の文書は信長が初めて商業関連の制札を発給する上で、他と区別するために「制札」を用いたと思われ、それがなんらかの理由で「定」へと変化したのではないだろうか。

ここまで織田氏の「制札」を見てきたが、2通とも初期ゆえの理由であったと言える。織田氏は

初期より制札の表記を「禁制」とし、商業関連を中心に戦時のもの以外については「定」を用いており、織田氏の制札の基礎はできていたと言える。

以降は各時代でどのような制札が出されたかを見ていく。

【註】

- （１）富澤一弘・佐藤雄太未刊行論文「戦国期における制札の研究―関東甲信越地方を中心として―」（平成22年2月）

第2節 永禄11年（1568）、稲葉山城攻略後

この時期、第1章でも述べたが、織田信長が足利義昭を擁して上洛した。その際、大量の制札を発給したが、その様式を述べておく。

上洛した9月以降に出された制札は24通あり、そのほとんどが前述の文書【史料1-1】と同様に3箇条の「禁制」で軍勢の乱妨・狼藉の禁止、陣取・放火の禁止、竹木の切り取りの禁止を基本とし、場合によっては矢銭・兵糧米を徴収することの禁止がどれかと入れ替わることもあった【註1】。

このなかで少し異なるものとして近江沖島宛禁制がある【史料2-3】。

【史料2-3】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 186頁

（一〇一）近江沖島宛禁制（『沖島共有文書』『近江蒲生郡志』巻十所載写真）

禁制

沖島

一、当手軍勢濫妨・狼藉之事、

一、放火事、

一、廻船令違乱之事、

右条々、於違犯之輩者、速可処嚴科者也、仍執達如件、

永禄十一年九月日

弾正忠（花押）

この沖島は琵琶湖に浮かぶ島であり、そのため3箇条目が船での安全を保障するものとなっている。このように一部では在地の事情を考慮して条目を変更する場合も見られる。

これ以降織田氏では朝倉・浅井や武田氏を滅ぼし、広い新領地を得た際に、先の3箇条で簡潔な禁制を大量に発給する様子が見られる【史料2-4】。

【史料2-4】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 668-669頁

（三九一）越前惣社等宛禁制（『越前武生町惣社大神宮文書』○越前）

禁制

惣社大明神并社家

一、甲乙人等、濫妨・狼藉之事、

一、陣取・放火之事、

一、伐採竹木之事、

右条々、堅令停止訖、若違犯輩在之者、速可処厳科者也、

天正元年八月日

^(信長)
(朱印)

【註】

(1) 奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻(吉川弘文館、昭和63年9月) 205-206

頁 山城妙顕寺宛禁制など

第3節 天正3年(1575)、越前一向一揆鎮圧と柴田勝家越前入

越前一向一揆鎮圧時も前述したように織田信長の3箇条の簡潔な禁制が出されるが、それとともに柴田勝家の文書も出されている【史料2-5】。

【史料2-5】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』下巻(吉川弘文館、昭和63年9月) 99頁

【参考】越前新郷宛柴田勝家禁制(『斎藤文書』○越前)

定 越州新郷^(郷)

一、当郷百姓等、早々可還住事、

一、新儀非分族申懸輩在之者、為地下人可直奏、并祀銭・祀物已下於立入者、双方可為同罪事、

一、山林・竹木伐採者、押置可注進事、

右条々、於違犯輩者、可処厳科者也、仍下知如件、

天正参年九月日

^(勝家)
(柴田)(花押)

柴田勝家の文書は織田信長のものと異なり、文頭の表記も「定」である。また内容に関しても、百姓の還住、揉め事についてなど、実際の支配に関することが具体的に書かれており、簡潔な信長のものと大きく異なっている。

これを見ると、地方を任せられた織田家重臣の文書は、信長自身の文書とはまた異なることがわかる。この重臣の制札については今後の課題としていきたい。

第4節 天正10年(1582)、武田氏旧領に対する制札

第1章で述べたが、武田氏滅亡後の織田氏は旧武田領へ「禁制」を大量に発給した。ここでは先の3箇条以外に百姓の還住令、非分な役を課すことの禁止が頻繁に見られる【史料2-6】。

【史料2-6】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』下巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 710-711頁

（九九四）信濃南方村宛禁制（「滝沢文書」『信濃史料』第十五巻所収）

禁制

信州小県県内南方村

- 一、甲乙人等、乱妨・狼藉事、
- 一、対還住百姓已下、成煩事、
- 一、非分課役事、付御判錢・取次錢・筆耕等、同事、
- 右条々、若有違犯之輩者、速可被処嚴科者也、

天正十年三月 日

^(信長)⁽²⁾
(朱印)

特に「非分課役」の条には「付けたり」で、「御判錢・取次錢・筆耕錢」など仲介料を課すことも禁止している。

この甲信地方へは信長の嫡男信忠の制札も出ている【史料2-7】。

【史料2-7】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』下巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 717頁

〔参考〕甲斐奈良原宛織田信忠禁制（『広済寺文書』○甲斐）

^(織田信忠)
禁制 (花押)

奈良原

- 一、甲乙人等、乱妨・狼藉之事、
- 一、陣取・放火之事、
- 一、還住之者違乱之事、
- 右条々、若於違背之輩者、速可処嚴科者也、仍下知如件、

天正十年三月 日

(包紙)「信長公嫡子城助^(介)信忠公」

この禁制の内容は織田信長のものと文頭の語、内容は同様だが、花押の位置が他の信長と異なり、文頭の「禁制」に重ねる高い位置にきている。これは権威の高い様式（袖判）で、この時の織田信長の制札には見られないものであり、信忠文書の特徴の可能性もある。この点に関しては、今後さらに検討していきたい。

第3章 結論と今後の課題

ここまで織田氏の制札について信長発給文書を中心に検討してきた。

数量的検討については第1章でも述べたが、織田氏の制札数の変遷は、実際のできごとと関連性が非常に強いことがわかった。また本論文では織田信長自身の文書が中心で、織田家臣のものは収集しきれていなかったが、それでもよい結果を得られたことから、織田政権における織田信長の重要さもうかがい知ることができた。

次に文頭の表記についてであるが、織田氏の制札はそのほとんどが「禁制」表記で商業関連については「定」を用いており、これは今まで研究してきた後北条氏・武田氏・今川氏とは異なり、画一的であった。

これは最初期を除き、尾張時代からの傾向であり、岐阜城を本拠とした時期には、ほぼ確立していたと思われる。全国的な政権になってからも同じ様式であることから、織田氏が強権威で高圧的であったとも推測できるが、この点に関してはさらに検討していきたい。

以上が今回の論文で明らかにでき、織田信長本人の文書は多く集められたが、織田氏の家臣のものについてはまだ少なく、前述の柴田勝家や明智光秀ら重臣や、京都所司代のものなどまだ多くある【史料2-8】。

【史料2-8】

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』下巻（吉川弘文館、昭和63年9月） 819頁

（四九七）山城清涼寺宛村井貞勝・明智光秀連署禁制（『清涼寺文書』○山城）

嗟峨

清涼寺

禁制

一、国質・所質之事、

一、喧嘩・口論之事、

一、押買之事、

右条々、千部経中堅令停止訖、若有違犯之輩者、速可処厳科者也、仍如件、

天正参年二月十三日

村井民部少輔

貞勝（花押）

明智十兵衛尉

光秀（花押）

これらの人物も自治体史等を用いて収集していく予定である。今後それらの研究も進め、織田氏

の制札についてさらなる検討を重ねていきたい。

（とみざわ かずひろ・本学経済学部教授／

さとう ゆうた・本学大学院経済・経営研究科博士後期課程）

参考文献

愛知県史編さん委員会『愛知県史』資料編10中世3（愛知県、平成21年3月）

愛知県史編さん委員会『愛知県史』資料編11織豊1（愛知県、平成15年3月）

相田二郎編『戦国大名の印章－印判状の研究－』（名著出版、昭和51年4月）

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』上巻（吉川弘文館、昭和63年9月）

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』下巻（吉川弘文館、昭和63年9月）

奥野高廣編『増訂織田信長文書の研究』補遺・索引（吉川弘文館、昭和63年9月）

岐阜市編『岐阜市史』史料編 古代・中世（岐阜市、昭和63年2月）